

事業活動実績報告書

施設名	幼保連携型認定こども園そあ
教育理念	“1人ひとりが主役になる教育保育 自然の中で全身を使って五感を育む・時間を忘れて遊ぶ・赤ちゃんからお年寄りまで関わり合う生活・ほんものの食事”
事業の区分 (5領域)	健康 ・ 人間関係 ・ 環境 ・ 言葉 ・ 表現
1 事業名	自然の中で「不」を体験する。
2 実施期間	令和 6年 4月 1日 ~ 令和 7年 3月 31日

3 取組概要	<p>(取組日) 令和 6年 4月 1日 ~ 令和 7年 3月 31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>・農園での野菜、植物の栽培 職員が植えた野菜の水やりや肥料を加えるお世話をきっかけに、栽培への興味関心を広げ、収穫に取り組んだ。採れたての野菜を味わい、野菜の匂いや触り心地、美味しいや生臭いといった味等を五感で味わう体験をした。9月より水耕栽培にも挑戦し、育たない体験を踏まえ、試行錯誤をしながら長期継続的に栽培を行なった。</p>	
	<p>(取組日) 令和 6年 4月 1日 ~ 令和 7年 3月 31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>・水辺探索 水辺探索においては、日常の保育から水辺での遊びを取り入れたことで、子どもたちの探求心と創造性の育ちにつながった。自分たちが魚になりきって遊んだり釣りをするを通して水辺という自然への関心を高めた。水辺という環境が、年齢や興味関心に合わせた多様な遊びや学びを生み出し、子どもたちの豊かな発達を促したと考える。</p>	
	<p>(取組日) 令和 6年 4月 1日 ~ 令和 6年 9月 31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>・川の活動 葛飾区内にある西水元水辺の公園のワンド内で水辺の生き物を探索し触れ合う活動を計画した。7月上旬と9月下旬で活動時期を変えて2回活動を行い、活動前後で活動場所の写真を見ながら3つの質問を行い、子どもの発言を比較した。活動前は、図鑑やテレビ等を踏まえ、「川には、マグロがいる。サメがいる」と目を輝かせていた。7月に実際に体験することで「ベンケイガニ」や「テナガエビ」等生き物の名称や特徴を詳しく話し、大きさや形を手や体、絵で表現する姿につながった。2回行うことで、子どもたちは「次はカニをたくさん捕まえたい」と具体的に目標を掲げ、目当てをもって取り組む姿につながった。 7月の川での体験を通して、実際に「ベンケイガニ」や「テナガエビ」といった生き物と出会い、その名前や特徴を熱心に学ぶ姿が見られた。子どもたちは、ベンケイガニのハサミの大きさを両手で表現したり、テナガエビの長いハサミを絵に描き、その特徴を表現していた。2回目の活動では、「次はもっと大きなカニを捕まえたい！」「たくさんテナガエビを見つかるぞ！」と、具体的な目標を掲げ、意欲的に活動に取り組む姿が見られた。多くのことを積極的に体験する姿が見られ、表現や、探求心が深まりにつながっていると感じた。</p>	

3 取組概要	(取組日) 令和 7年 2月 1日 ~ 令和 7年 3月 31日	<p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <hr/> <p>・船づくり 船づくりにおいては、釣りから船釣りに見立てた玩具を用いた遊びが生まれ、子どもたちは浮くことにも興味を持ち始めた。様々な素材を船に見立て遊んだり、竹を用いて船ごっこを行った。次第に竹を切ったり、ドリルを使う中で工具や素材に関心が生まれ、船ではなく竹を使った物づくりへと展開した。</p>	
	(取組日) 令和 6年 4月 1日 ~ 令和 7年 3月 31日	<p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <hr/> <p>・木、竹育 船づくりに使用予定であった竹を、触ったり、切ったりすることで竹での工作への関心につながった。竹をドリルで穴を開ける場面では、初めは道具を使うことに面白さを感じていたが、次第に柔らかい竹と硬い竹があることに気づき、素材の違いに面白さを感じ始める姿が見られた。道具の使い方を理解した子どもたちは、のこぎりを使って自分たちで木片を削り、おもちゃを作るなど、創造性を活かした活動に発展させた。</p>	
	(取組日) 令和 6年 7月 1日 ~ 令和 7年 3月 31日	<p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <hr/>	<p>写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの</p>
	(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	<p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <hr/>	<p>写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの</p>
	(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	<p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <hr/>	<p>写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの</p>
	(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	<p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <hr/>	<p>写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの</p>

効果検証報告書

施設名	幼保連携型認定こども園そあ
教育理念	“1人ひとりが主役になる教育保育 自然の中で全身を使って五感を育む・時間を忘れて遊ぶ・赤ちゃんからお年寄りまで関わり合う生活・ほんものの食事”

事業の区分(5領域)	健康・人間関係・環境・言葉・表現
------------	------------------

1 事業名	自然の中で「不」を体験する。
-------	----------------

2 事業概要	<p>これまでの教育・保育活動を通じて、葛飾区内での自然体験活動において、子どもたちが自然の中で「不」を体験することの重要性を実感しました。「不」とは、不便さや不確かさを指し、子どもたちが自然の中で直面する予測できない出来事や困難を意味します。園内の自然の中でできる「不」の体験から、その「不」をさらに深く体験するために、園外の水辺や水元公園など、より大きな自然に触れ、様々な「不」を体験できる機会を広げていきます。例えば、区民農園や水元公園、西水元水辺の公園のワンドなど、葛飾区内の身近な自然環境から始め、必要に応じて区外に出て「不」を体験できる機会を創出していきたいと考えています。</p> <p>こうした体験は、子どもたちにとって非常に貴重な学びの機会であり、雨や台風などの予測できない天候の変化や、不便な環境の中での活動を通じて、子どもたちは自然と共生する力を育みます。</p> <p>こうした環境での遊びや学びを通じて、子どもたちは自ら考え、解決策を見つける力を身につけ、子どもたちの興味関心を広げ、社会への関心の基礎を築くことに繋がると考えています。</p>
--------	---

計画時

3 実施体制	<p>取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況</p> <p>“建築士(主幹教諭、用務) ・保育、園児指導(幼児クラス担任、散歩見守り職員)・外部講師(カワセミの里自然観察員、環境カウンセラーとして葛飾区生物多様性推進協議会委員、緑化推進協力員、3R推進パートナー、地球温暖化対策推進協議会委員、消費生活審議委員、環境省臨時審議委員在籍 ・野外救急救命国際資格ILCOR準拠Adult Child Infant CPR+AED(ウィルダネスジャパン)の受講(今後、全職員受講予定)・大学院在学中の職員・ユンボ資格取得者・国際MFAインストラクター資格者”</p>
--------	--

事業後

3についての効果・検証	<p>事業実績から推測される効果や改善点等</p> <p>上記に記載した実施体制をさらに充実させるため、今年度は新たに「レスキュー3(水辺の安全管理や救助技術に関する国際的な資格)」および「チェーンソー安全講習」の資格を取得しました。これにより、水辺や山林といった自然環境下での安全管理体制が一層強化され、木材の伐採から運搬、加工までの一連のプロセスを、より安全かつ実践的に子どもたちに提供できるようになりました。今後も、自然体験活動に関するさまざまな資格の取得を目指し、子どもたちが多様で豊かな体験を安心して積み重ねられる環境づくりに努めていきたいと考えています。</p>
-------------	---

計画時	4 事業のねらい	<p>法人の教育理念に掲げた4つの柱である「自然の中で全身を使い五感を育む」「時間を忘れて遊ぶ」「赤ちゃんからお年寄りまで関わりあう生活」「ほんものの食事」を体験できるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園児が様々な体験を通して、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿及び、生きる力の基礎をはぐくむ。 ・自然の中で、「不」を体験できる活動を提供する。
	事業後	<p>4についての効果・検証</p> <p>事業実績から推測される効果や改善点等</p> <p>今年度の事業を通して、法人の教育理念に掲げる4つの柱である「自然の中で全身を使い五感を育む」「時間を忘れて遊ぶ」「赤ちゃんからお年寄りまで関わりあう生活」「ほんものの食事」の体験を子どもたちに提供することができた。特に、竹林の整備や築山づくり、火起こし、田んぼでの米作り、木材の伐採から加工までの一連の体験など、自然との関わりを深める活動は、子どもたちの主体性や協調性、粘り強さといった「生きる力の基礎」を育む上で大きな効果があったと考えられる。</p> <p>また、雨や寒さ、思い通りにいかない自然環境に身を置く中で、子どもたちは「不自由」「不快」「不安」「不便」などの『「不」の体験』を経験し、自分なりの工夫や葛藤を通して、心と体の回復力(レジリエンス)を高めていく姿が見られた。これは、自然の中でこそ得られる貴重な学びであり、都市部では特に意識的に設計する必要のある体験である。さらに、レスキュー3やチェーンソー講習といった安全管理に関する資格取得により、活動の幅が広がっただけでなく、リスクマネジメント体制が強化され、より安心・安全な環境で体験を提供できるようになったことも成果の一つである。</p>
事業後	5 取組の内容	<p>計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7月、9月の2回 川の活動 ・1月漁業体験 ・4月から翌年3月まで 水辺探索、船づくり ・4月から翌年3月まで 木育、薪割り ・4月から翌年3月まで 農園での野菜、植物の栽培 ・4月から翌年3月まで 海・山・川・森・生き物・火に触れる
	事業後	<p>5についての効果・検証</p> <p>事業実績から推測される効果や改善点等</p> <p>今年度の事業を通じて、子どもたちには多くの自然体験を提供することができた。火起こしや竹林整備、川遊びなどの活動を通して、子どもたちの主体性や創造性、自ら考えて行動する力が育まれていることがうかがえた。また、土や水、風など自然に直接触れることで、五感を使った豊かな感性や季節の変化に気づく力も育ってきている。一方で、体験を単発で終わらせず、日常保育とつなげていくための工夫や、活動の記録と振り返りを保育者間で共有する仕組みづくりなど、今後さらに深めていくべき課題も見えてきた。地域との連携や、職員の学びの継続も引き続き意識して取り組んでいきたい。</p>

計画時	6 環境構成	・水元公園を含む、葛飾区や近辺の環境から、川を下った先にある海や、近隣の小塚山(市川市)や森、農園(松戸市)を活用する。
	事業後	<p>6についての効果・検証</p> <p>事業実績から推測される効果や改善点等</p> <p>水元公園や川、海、森、農園といった多様な自然環境を活用することで、子どもたちは日常では味わえない本物の自然体験を積み重ねることができた。川の流れの変化、海の広がり、森の静けさ、農園での土の手触りなど、場所ごとの特性を感じながら、五感を使って自然と向き合う姿が見られた。また、異なる自然環境を行き来する中で、子どもたちの好奇心や探究心が育ち、「もっと知りたい」「やってみよう」と思う気持ちが自然に引き出された。移動や準備を含めたプロセス全体が学びとなり、忍耐力や柔軟な適応力も育まれている。</p> <p>このような体験は、都市部に暮らす子どもたちにとって非常に貴重であり、自然とのつながりの中で育まれる“生きる力”の土台となっていると考えられる。</p>
事業後	7 期待される効果 児童の姿	<p>取組を通じて期待される児童の姿や効果等</p> <p>・自然に積極的に関わることで、物事の性質や仕組みを感じ取ったり気付いたりする。そして、それについて考えたり予想したり工夫したりすることで、考えを深める。また、友達のさまざまな考えに触れることで、自分とは異なる考え方があることに気付き、考え直したり新たな考えを生み出そうとする。</p> <p>・自然の不思議さを様々な手段で探求したりすることで、身近な自然現象に対して関心を持つ。</p> <p>・感性を刺激する出来事に触れることで、様々な素材の特徴や表現方法に気づき、自分の感じたことや考えたことを表現したり、友達と共有する過程を楽しむことで、表現の喜びを味わう。</p>
	事業後	<p>7についての効果・検証</p> <p>事業実績から推測される効果や改善点等</p> <p>自然の中での活動を通じて、子どもたちは身の回りの自然の不思議さや仕組みに気付き、自分で考えたり予想したり、友達の考えにも触れながら発想を広げていく力が育っている。</p> <p>また、五感を使って自然や素材に触れる中で、感じたことや考えたことを自分なりに表現し、友達と共有する楽しさを味わいながら、豊かな感性や表現力が育まれている。</p>
8 効果検証 総括	<p>事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて</p> <p>今年度の取り組みを通して、自然環境の中での「不」の体験——すなわち、「不自由」「不便」「不快」「不安」といった感覚を伴う経験——が、子どもたちにとって非常に大きな学びの機会であることを改めて実感した。</p> <p>暑さや寒さ、ぬかるみや泥、水の冷たさ、煙の匂い、虫への恐怖、思い通りにいかない自然の変化…。こうした「快適とは言えない」状況の中に身を置くことで、子どもたちはまず戸惑い、時に嫌がりながらも、次第にそれを乗り越えたり、どうすればうまくいくかを自分なりに考えたり、友達と相談しながら工夫する姿を見せるようになっていった。</p> <p>この「不」の体験は、大人が与える予定調和の環境の中では得られない、自発的な問題解決力や柔軟な対応力、そして何より、自分で選択し、自分で乗り越えたという達成感や自信を育てる力がある。安全を確保しつつも、あえて「不」の体験を避けないことの大切さを、子どもたちの姿から学ばせてもらった。</p> <p>また、「不」を感じる場面では、子どもたち同士のやり取りも自然と深まりやすくなる。誰かが泣いたり困っていたりする時に、寄り添ったり助け合ったりする姿が多く見られ、人とのつながりの中で“共に生きる力”も育まれているように感じた。</p> <p>今後の保育・教育においても、「不」をあえて排除しすぎない環境づくりを意識していきたい。すぐに正解を与えるのではなく、子どもたちが感じ、考え、行動する余白を残すこと。自然の中での“思い通りにならなさ”を楽しみに変える経験が、これからの時代を生きる子どもたちにとって、かけがえのない力となると確信している。</p>	